かなかに哀愁をさそう出航風景なのだが、そんな気持ちはさらさら無かった。船が渤海湾を進むころになると今までに散々同胞を痛み付けていた者が次々と捜し出されて、甲板上で吊し上げにあっていた。船内では、日本の国内情報がこまごまと放送されていた。わたしは、自然に「ドスブダーニャダルニー」（さようなら大連）とつぶやいていた。

大連を出航して十六日目に、朝霧の中に島々が点々として見えてきた。その島々の頂には青々とした松が生えていて、私たちを温かく迎えてくれた。昭和二十二年三月二十五日、博多沖に遠州丸は錨を下ろした。ここは、確かに日本領海である。やっと日本に帰り着いたのだった。

十二　結び

引き揚げてからの生活再建は、すべての引揚者と同じく艱難辛苦の日々であったが、幸いに今日まで生きてこられたのは、私を取り巻く多くの人々の温かい庇護があってのことと感謝してやまないし、ことあるごとに昔の友人、知人の無事を念じて尋ね歩いている。多くの軍人、軍属そして民間人の方々が亡くなられたことを痛惜し、心からご冥福をお祈りするとともに、平和を祈らずにはおれない。

白い墓標

兵庫県　渋谷恭子

真っ青な空の下の南新京の広野は、果てしなく白かった。日差し映える雪はまばゆく、緩やかな起伏をなして光に満ちている。人が踏んで固めた道を、小学校三年生の私は、母の後から遅れぬようについて走っていた。羅紗の三角帽子に、綿入れの半纏は暖かかった。白熊の毛でできたシューバは、母がお金に替えてしまったが、手作りの半纏も軽くて暖かで、防寒靴から入り込んで来る冷たさも感じなかった。

緩やかな坂を越えると、またその先に果てしない広野が続いていたが、そこに白木の柱が群立しているのが見え始めた。黒い粒のように見えた人影に段々と近

づいていくと、服装が分かるとともに、あの嫌な臭いもしてくるのだった。横に低く煙が流れる日もあれば、一筋まっすぐに高い空へと昇っていく日もある。四、五人の男たちが、長い棒を持って遺体を突つきながら焼く姿が間近になると、私は顔を背けて、立ち並ぶ白い墓標と反対の方を見ながら走り抜けるのだった。焼かれて骨になるのは恵まれた人たちだった。焼くにはたくさんの薪を必要としたからである。隣の家の赤ちゃんが亡くなったときは、母が、薪の代わりに古い簞笥を持っていった。赤ちゃんでさえ、それほどたくさんの薪が必要だったのだ。

昭和二十（一九四五）年八月十五日の敗戦を境にして、いろいろな悲劇が始まり、家を失い飢えに苦しむ人々はさらに極寒の季節を迎えた。その結果、瞬く間に、雪原をうずめ尽くす勢いで白木の墓標が立ち並んでいった。新京（長春）と、南新京を隔てるこの広原を、私は何度往復したことだろう。

新京市内にあった私たちの家は、満州国政府外交部の建物と道を隔てた向かい側にあったが、そこへ折々に衣類や、日常の生活用品を取りに行くのだった。二階をソ連軍の将校が占拠していたので、いつも後ろからついて行く私たちを、母は決して中に入れなかった。

ソ連軍将校が、二人の兵隊を従えて我が家にやってきたのは、昭和二十年の九月も末のころだった。交渉は紳士的だったが、三つの部屋に続くベランダから、目と鼻の先にソ連軍の駐屯する外交部の建物が望める二階を、すっかり気に入り、直ちに明け渡すように母に命じた。一階に移るための猶予は、丸一日だけ与えられた。

一階には、満州の奥地から避難してきた二家族が入っていて、洋間が一部屋空いているだけだったので、その夜に私たち家族は二階からその洋間に移ったが、ところ狭しと置かれた家具や家財の谷間で、折り重なるようにして寝るほかなかった。

真っ先に新京市に侵入して、略奪や暴行をほしいままにしていた囚人部隊のソ連兵とは異なって、二階に入った将校は、身の丈が高く、目は青く澄んでいて、

人品卑しからぬ風采で、戦前の映画で人気のあった、ヴァレンチノによく似ていたが、朝早く家を出て、夜は遅く帰ってくるので、私たちとはあまり顔を合わせることはなかった。

一週間ほどたったある夜、妹のすすり泣く声で目が覚めた。母がいないと言うのだった。やがてどこからか戻ってきた母は、寝ていた姉や、弟も起こして、「急いで着替えをしなさい。オーバーを着て、裏の加藤さんの家に逃げるのよ」と、私たちをせき立てた。

満州の九月末は、日本内地の冬と同じであるが、雪はまだ降っていなかった。加藤さんの家の裏口まで五十メートルぐらいあったが、そこまで腹ばいになり肘を使って進んだ。頭を下げて音を立てないようにして暗やみを進むので、長い時間が掛かり、やっとの思いで加藤さんの家にたどり着いた。加藤のおばさんは、事情を承知していて、私たち姉弟妹の五人を次々に家の中に入れてくれて、急いで扉の鍵を下ろした。やがて程なくして、母と、我が家に同居していた初枝さんが、戻ってきた。初枝さんは、お酒臭くて赤い顔をしていたが、すぐに床に入ってしまった。

いつもは毎夜、お風呂を沸かすと、二階のドアの外から将校にその旨を知らせるのは母の役目だったが、その日に限って初枝さんが知らせに行った。半開きのドアから首を入れて、お風呂の沸いたことを知らせると、将校が手招きをしたそうだ。テーブルの上には、かつて見たこともないキャンディやカルパスやチーズが載っていた。それを見た初枝さんは、思わず部屋の中へ入ってしまった。

いつまでたっても戻って来ない初枝さんを案じて、母が二階に行くと、コニャックを飲まされた初枝さんは、快い気分になっていて、長椅子にもたれかかっていた。驚いた母が、一階に連れ戻そうとすると、いつもは温和な将校が、手で母を遮ったとのことだった。あとはロシア語で何か言っていたが、母には通じない。無理やりに初枝さんの手を引くと、将校の声が荒々しくなり、顔つきも険しくなってきたので、母は恐ろしくなり、慌てて階段を駆け下りた。この家の中の日本人男性といえば、北満の奥地からの避難者で、

開拓団員の五十過ぎのAさんしかいない。寝ているところを呼び起こして、母は泣きついた。起こされたAさんは、一通りの話を聞いて、「やはり、女が欲しいのでしょう」と、腕組みをしながら言った。男性を相手にする女性たちがいる家は、歩いて二十分ぐらいのところにあるが、そこに話を持っていこうとは、なかなか言わないAさんに、母は声を強くして、「男はあなた一人ですよ。行って下さい」と、再三懇願した。渋々と承知したAさんは、真っ暗やみの寒い夜道を出掛けて行った。

Aさんが戻って来るまでの間、Aさんの奥さんは、玄関の床にべったりと腰を落としてしゃがみ込んで、祈るように両手を合わせて動かなかった。玄関は、防寒のため二重扉になっていたが、冷え込んでしまった。

そのうちに、思っていたより早く、美しい女の人が黒いレースの縁飾りのついたショールを頭から巻いて、Aさんと一緒にやってきた。ロシア語も少しは分かるこの女の人は、やがて初枝さんを無事に一階に降ろしてくれて、母をはじめ一同は、ほっと安堵した。

次の夜のこと、何か騒々しい物音に目が覚めると、明るい灯の下にひきつけを起こして、ぐったりしている妹の顔が目に入った。舌をかまぬようにタオルを口に入れてやりながら、母は妹の名を大声を出して呼んでいる。母の顔は、青ざめてつり上がっていた。妹は、激しく体を震わせていて、息が絶えそうだった。恐ろしい夜が明けて、どうにか妹も落ち着いた。疲労困ぱいした母は、もうこの家にいることが怖くなり、南新京にある父の友人の家に逃がれることを決心した。

暦は十月となり、雪に覆われた広野を私たち一家七人は、荷物と共に荷馬車に乗って南新京に行くことになった。わずかばかりの手回り品と、当座の食糧で荷台はすぐいっぱいになった。父の友人の占部のおじさんが、荷台の一番前に座って道案内をしてくれた。今にも大雪になりそうなどんよりとした空の下で、私はおじさんの隣に座ったが、悪路の野道で荷台が大きく前後左右に揺れて、その度におじさんの手につかまっ

ていたが、大きな手だった。父のいない我が家に父が戻ってきたようで、住み慣れた我が家を離れる悲しみを、少し和らげてくれるような気持ちになっていた。おじさんの奥さんが、母のいとこに当たり、声が母に非常に似ていた。出迎えてくれた三歳の隆君は、栄養不良のようで、顔色が悪くて体も小さかった。

私たちは、満州国政府の役人だったおじさんの官舎の二階八畳間に落ち着いた。隣の部屋には、奥地のK省から避難してきたおじさんの親友、菅さん夫婦が私たちより先に住んでいた。「恭ちゃん、お父さんは必ず戻って来るよ。それまでは、おじさんのところで待っていようね」と、言ってくれた。おじさんは、父の第六高等学校時代の柔道部の後輩だった。柔道マンのおじさんは、お相撲の関取のように大きな体をしていた。耳は蝸牛（かたつむり）を押しつぶしたような格好をしていて、柔道での激しいけいこでつぶれたのだと言っていた。牛肉が大好物で、敗戦前は毎日のように食べていたそうだが、今は「お肉がないと寂しいね！」と言いながら、高粱飯（コーリャン）や、粟雑炊で頑張っていた。

おばさんは、初枝さんを見て、「断髪して男装にしなさい」と、初枝さんに勧めた。初枝さんは、幼時に「脳膜炎」を患って多少知恵が遅れていたが、お人好しで心の奇麗な二十歳の娘さんだった。一番下の妹が生まれたときに、日本から我が家の手伝いに来てくれたのだった。近所の人にも勧められて、初枝さんは髪を切り男装した。ソ連兵に襲われないためである。

小学校六年生の女の子が、下半身を血に染めて、留守番をしていた家で一人死んでいたとか、赤ちゃんを背負った母親が、赤ちゃんと共にソ連兵に連れ去られたとか、また、線路端で石炭を拾っていた人たちの群れに、急停車した貨車から四、五人のソ連兵が飛び降りてきて、若い女性数人を貨車に引きずり込んでそのまま行ってしまったとか、一切の報道機関がその機能を停止していて、まともに読める新聞一つないときに、いろいろと悲惨な話ばかりが、口伝えに流れてきた。

敗戦という状況のもとで、悲惨な役目を担うのは、いつの時代でも女性である。母たちは、女の人が集ま

るところでは強姦という言葉を、よく口にしていた。日常のおしゃべりの中でもよく出てきた。小学生だった私は、強姦とは、女だけに襲いかかるドラキュラだと想像していた。

そんな状態におかれているときのおじさんの存在は、頼もしかった。明るくユーモアがあり、大きな体をしていたが、その体に似合わず小さな蛙の歌を、いつも口ずさんでいた。

「蛙の夜回り、ガクゲクガクピョンピョン。
雨降れ、雨降れ、ガクゲクピョン。
ガクピョン、ゲクピョン、ガクゲクピョン」

朝起きると歌っている。服を着替えながらも、ひげをそりながらも歌っていた。夜は、湯舟の中から聞こえて来る。隣の菅さんの部屋で麻雀をしながらでも、歌うことがあった。麻雀といえば、一晩中、牌の音が隣室からすることが度々だった。

その後、私たちからも音のお返しをすることになってしまった。治安はますます悪くなり、人々は早くに灯を消して息を潜めて夜を過ごしていた。二階に住んでいた私たちは、真っ暗な階段を降り、廊下を突っ切って手洗所へ行かねばならなかったので、七歳の弟や、三歳の妹には危険だった。そのため、二階の戸口の隅に「おまる」と言っていた瀬戸引きの便器を置いていたが、用を足すときに、「ばりばり」と跳ね返る音が、静かな夜陰に響いていた。菅のおじさんは、「真夜中に大暴風が来たかと思うよ。あれには参るなぁ！」と、苦笑していた。

菅のおじさん、おばさんが、仲良く肩を寄せ合って話し込んでいたり、隆ちゃんが父親に甘える姿を見るときなどには、私は、父を思い出して恋しくなっていた。

家から父がいなくなったのは、昭和二十年九月初めの夕方だった。満州国政府の総務部長だった父は、戦犯の罪を問われてソ連軍に連行されたのだが、それは全く突然の出来事であった。一家八人が、夕食のおぜんについているときに、軍用トラックが家の前に止まった。ソ連兵が三人降りてきて玄関に立つと、出てきた父にロシア語で何か言ったが、父は黙ってうなず

き、和服から洋服に着替えるとすぐにトラックに乗せられた。「ちょっと調べたいことがあるので、来てほしい」ということだったので、すぐに帰れるものと思い、身の回りの荷物も何一つ持たずに連れて行かれた。ソ連兵が、「もう一人、乗せる人があるから！」と言っていたので、父はトラックの上で、三十分ばかり待たされた。まだ明るかった空が、どんどん暮れ始め、父の吸っているタバコの火だけが、トラックの上にぽつんと一つ赤かった。連れられてきたもう一人が乗ると、トラックは動き出した。父は手を振らなかった。じっと立ったままで私たちの方を見ていた。私たち母子六人も一言も発しないで見送った。しかし、それが約三年三カ月にわたる長い別れになるとは、誰も思わなかった。

おじさんは、夕食のお酒を飲みながら、いつも「お父さんは、必ず戻って来るよ」と、言ってくれるのだった。

母や、同じように夫を連行された都甲のおばさんたちは、集まると、「私たちのことを、半後家っていうんだって」とか、「ソ連は、不可侵条約を結んでおいて、向こうから攻めてきたくせに、戦犯だといって連行していくなんて……」「一体、どこに連れて行ったのかしら」とか、「トランプ占いで、よく当たるのがあるそうよ」などと、いろいろ話し合っていたが、ある日、雪の草原を越えて市内に荷物を取りに行った帰りに、その話に出たトランプ占いの家に母たちは立ち寄ったらしい。それぞれの夫の写真を、テーブルの上に置き、鎖のついた玉を写真の上にぶら下げた。その玉の動きで生死を占うらしかった。母は、順番を待っているときに、もし死んでいると言われたら、これから先、生きていく自信がなくなりそうだと思い、順番が近づいてきたとき、抜け出してしまったとのことだった。母は、「生きていると、私が信じれば、お父さんは必ず生きて帰って来る」と思ったそうだ。占いの人に払うはずのお金で、あん巻をたくさん買って戻ってきた。おじさんも、「それはよかった」と、太い大きな指で、あん巻をつまんで食べた。「先輩は、柔道で鍛えた体だ。百人中九十九人が死んだって、一

人で生き残って帰ってきますよ。それよりも、腸チフスと、発疹チフスが市内で猛威をふるっているらしいので、皆十分に注意をしよう。我々も頑張って生きて日本に帰らねばならんですよ！」と言って皆を励ましてくれた。

チフスで死ぬ人が激増してきて、雪の広原の白木の墓標が、日一日、一日と数を増していた。墓標が立てられずに、土まんじゅうだけの墓も増えていった。

そんな逆境の時でも、人は愛を語るもので、おじさんのかつての部下が、十二月に結婚することになった。暗い毎日の生活の中での、数少い明るいニュースに皆は喜んだ。日没後の外出は禁止されていたので、おじさんは結婚式の後、市内の友人宅に一泊してくると言っていた。

出掛ける朝、靴を履きながらおじさんは、「明日のお土産は何がいいかな、恭ちゃん！」と、声を掛けたので私はすぐに、「アルメニアの洋生がいい」と答えた。「そう言うと思ったよ。よしよし分かった」と言った。ケーキのことを、和生菓子に対して洋生菓子といい、それを略して洋生と呼んでいた。白系ロシア人の経営するケーキ屋の「アルメニア」の洋生は、とろけるように軽く真っ白なクリームの上に、ピンクの花が愛らしく絞り出してあった。粟や、高粱の雑炊腹の毎日には、百万ドルの夢の夢のごちそうを待つ思いで、私の期待は大きかった。

おじさんの帰らぬその夜は、菅のおじさんが酔って、前髪を目の上に垂らして怪獣のかっこうをして、私たちを追い回した。食卓を片寄せて広くなった茶の間を、私たちは逃げ回って騒いでいた。西郷隆盛を敬愛していたおじさんが、「隆志」と名付けた、最愛の子供である隆ちゃんも、栄養不良で体力がなかったが、それでもよろめきながら、しりもちをついたり、はったりして一緒になって騒いでいた。

翌日の十二月十四日は、朝から雪が降り続けて大雪になった。全室にスチーム暖房をたくだけの石炭がなく、「だるまストーブ」をたいて暖をとっていたが、一向に暖まらなかった。隆ちゃんが二階に上がってきて、妹と人形ごっこをして遊んでいた。私たちは、母

から命ぜられて、お正月の晴着を示された寸法に切り刻んでいた。ボール紙と帯芯に鏡をはり合わせて、晴着の小布でカバーを作って仕上げると、奇麗な懐中鏡になった。これを市内の中心街にある委託販売所に並べると、ロスケが喜んで買っていった。その当時は、ソ連兵の略奪行為と暴行行為を憎んで、ロスケと侮辱的に呼んでいた。

十時ごろ、おばさんが激しい勢いで階段を駆け上がってきて、「隆志!」と叫ぶと、しっかりと隆ちゃんを抱きしめた。「お父ちゃんが、死んだんだって、もう、お父ちゃんに会えないんだって! ひいっ!」と、声高に叫んでその後は、おえつで言葉が続かなくなった。私と姉とは、一瞬はさみを持ったまま、お互いに顔を見合わせるだけだった。隆ちゃんは、泣き崩れる母親に抱かれたまま、私たちの方に顔を向けて、ちょっと困ったような笑みを浮かべていた。

一階が慌しくなって、続いてすぐにおじさんが戸板に乗せられて運び込まれてきた。私は階段の中ほどに立ち、毛布に覆われたおじさんを見た。恐ろしくて近づけなかった。

昨夜、菅のおじさんと騒いでいた八畳の間に床が敷かれ、小机を置いて線香や、ろうそくが供えられた。私たちが騒いでいたあの時刻に、おじさんは撃たれていたのだった。結婚式が済んで泊るべき友人宅までの百メートルほどの道を、友人と二人で歩いていたときに、ソ連兵に誰何された。外出禁止令の出ている七時を少々過ぎていたので、すぐにでも土下座をして謝ればよかったのかもしれない。おじさんは、部下の結婚式の後の幸福な気持ちに、軽い酔いが手伝って、使い慣れないロシア語で弁解しようとしたらしい。体の大きなおじさんが、一緒にいた友人よりも一歩前に出て、よく通じないロシア語でしゃべろうとした時、「問答無用」とばかりに、機関銃の銃口が火を吹いた。五十メートル先の友人の家にもその音は響きわたったそうだ。興安病院に運び込まれたときに、おじさんは、「これしきのこと!」と、意識はまだ確かで、「まだ、まだ、死ねないからな!」と、しゃべっていたが、腸からの出血が止まらずに、やがて意識が薄れ始

め、「隆志！　隆志！」と、隆ちゃんの名を叫び続けながら、夜が明けぬうちに息を引き取ったとのことだった。「怒髪天を突くとは、本当のことなのね」と、おじさんの頭髪がすべて、まっすぐ上に逆立っているのを見て、母が言った。二階で、経帷子を縫っている母の横で私は、絵を描いた。お肉が何よりも好きだったおじさんのために、分厚いステーキにキャベツを盛ったお皿を描き、母に頼んでお棺の中に入れてもらった。

翌朝は、昨日の大雪とは打ってかわり、晴れ渡った日となった。出棺の時間が近づいても、私は二階から降りなかった。朝、顔を洗いに洗面所へ降りたとき、風呂場横の廊下におじさんのセーターと、ズボンが置いてあった。セーターには銃弾の跡らしき穴があり、ズボンは脱がせるために切ったのか、ずたずたになっていた。私は恐ろしさに二階に駆け戻った。玄関の扉が大きく開けられる音で、私はやっと階段の途中まで降りたが、おじさんの入ったお棺が玄関を出ようとするところだった。扉の向こうには、日にまぶしく輝く雪の道が見える。そこをお棺はゆっくり、ゆっくりと出ていった。続いて皆が出て行き、私一人が取り残された。一人になった私は、突然、食べられなかった洋生を思い出した。おじさんは、もう決して帰って来ないと思うと、涙があふれて止まらなかった。怒髪天を突くおじさんの無念さに加えて、銃を撃ったソ連兵が憎く、許すことができないと思った。階段の途中に腰を下ろして心の中で蛙の歌を歌いながら涙を流し続けた。

後年、チャイコフスキー、トルストイ、ドストエフスキーなどを知り、成人してボリショイバレエを見るまでは、私にとってソ連人とは許すことのできない野蛮な民族だった。

戦争は、「殺戮」と「慟哭」を地に満たし、民族間に許し難い憎悪を植えつけるものであって、日本兵もまた、他民族の人たちに、悲惨な思いを与えていたのだろう。

雪の広原に、おじさんの白い墓標が立ってから、そ

こを通ることが怖くなくなった。おじさんが、雪の下に横たわっていたからである。火葬にする薪を用意するだけの経済力がなかったので、土葬にしていたのだった。

いつ日本へ帰れるのかは分からず、ここで生きていくには、この先何年分ぐらいのお金が必要なのかなどを考えると、おじさんがいないことで、一層不安になってきた。弔問客がとぎれて、暗く陰鬱な年の暮れとなった。

新しい年が明けると、母は初枝さんを連れて城内に出掛けて、三枚八円でこんにゃくを仕入れてきた。それをバケツに入れて南新京の市場で売るのだった。バケツを前にして、母と私は並んで立っていた。「三つ十円のこんにゃくはいかがですか！」と、母は言うが、寒風に吹き消されそうな声だった。「三つ十円のこんにゃくはいかがですか！」と、私は母以上に声を張り上げたが、一枚も売れなかった。母は場所を変えてみることもせず、そのまま重いバケツを下げて家に戻った。初枝さんは、一枚三円にして全部売ってきたという。「明日は、私一人で売ってきましょう」と、張り切っていた。初枝さんは景気よく、翌日の夕方遅く戻ってくると、「今日は売れ行きが悪かったので、三枚七円にしたら、どんどん売れて売り切れになりました」と、得意顔になって言うのだった。

かくして、こんにゃく売りの商売をあきらめた母は、今度はどこからかたばこの葉を運んできた。幅広いたばこの葉の一枚、一枚に霧吹きでグリセリンを吹きつけ、部屋の中の鴨居に張ったひもに葉を広げて干した。甘いグリセリンと、たばこの葉の香りが家中に満ちていた。乾いた葉を畳んで包丁で細く刻み、それをほぐして辞書の紙で、一本のたばことして巻くのだった。新聞紙で作った袋に十本ずつ入れるのは、私たち子供の仕事だった。聞き伝えで、たばこを買いにくる人は、折々あった。儲かるからというよりも、働くことで母たちは、不安から逃れたかったのだと思う。この仕事は割り合い長く続いた。

ある日、荷物を背にして雪の原を歩いているときに、荷馬車と擦れ違った。荷台は私の背丈より高く、

そこに中国人の子供が三、四人、足をぶらつかせながら乗っていた。ちょうど私が、その真横を通ろうとしたときに、頭の上から一斉につばを吐きかけてきた。

敗戦までは、こんな目に遭うことはなかった。「五族協和」を父は唱え、アジア人同士は絶対に助け合わねばならないと教えられてきた。中国の婦人と結婚し、中国の人になろうとした人もあったが、民族間の問題は決して単純なものではなく、「五族協和」も一方的な付け焼き刃に過ぎなかったのか、敗戦で地位とか、権力とかの虚構性を見せつけられたようなことだった。

昭和二十年八月二十日、ソ連軍が侵入してきたとき、中国人の家々の軒先には、ソ連の国旗がはためいた。被征服民族の長い歴史を持つ人たちは変り身が早い。道端にはびこる雑草のごとく、ソ連軍、国民党軍、そして八路軍と、進駐してくる者の変化に従って、掲げる旗も素早く変わった。征服者とは、頭上を走り抜ける台風だった。島国で単一民族の日本人は、被征服者としての洗礼を受けていない。まっすぐに仲びた大木が、台風でぽっくりと折れたも同然の敗れ方だった。

昭和二十一年三月の末だったが、「火事だ！」という叫び声で外に飛び出ると、南東の方向に真っ黒な煙がたちのぼっていた。「学校だ！　学校が燃えている！」と、子供たちは騒いでいる。姉と私は、燃えている春光小学校に向かって走った。煙と一緒に空高く舞い上がって行く物も見えた。小学校には、蔣介石の率いる国民党軍が駐屯していた。火の勢いが強いので近寄ることができずに、遠くから見ていたが、大人の人たちが、「国民党軍が逃げて行くのに、証拠品を燃やしたんだ！」と、言っている。小学校は完全に燃え落ちたが、周囲が運動場と野原だったので、類焼の被害はなかった。

明け方になると銃声がとどろいた。怖い物見たさに、カーテンのすき間からのぞくと、前の広場で、黄色い軍服の兵士が数人、馬に乗って駆け回っている。国民党軍の軍服ではなく、初めて見るものだった。「八路軍だ。八路軍が来たんだ！」と、思った。

朝食のころには、八路軍の大部隊が行進して来た。隊長が、民家一軒一軒を訪れて、「野営のため、各家々の一階を一時的に貸してほしい。住民は二階でしばらく辛抱して下さい」と、丁寧に頼み込んでいた。我が家でも、おばさんと隆ちゃんが、二階に上がってきて、九人が一緒に寝ることになった。

八路軍の兵士は、どの顔も実に明るく晴れ晴れとして、礼儀も正しく、規律と統制がよく保たれていた。手早く、手順よく広場にかまどが築かれて、そこに直径九十センチメートルほどの、大きな鉄釜が掛けられて、米が炊きあがって来ると、吹きこぼれた米汁をすくい取り、別鍋でスープを作り、このスープをご飯にかけて食べていた。

勤務中は階級が見事に守られていて、隊長の音頭で事あるごとに整列し、革命歌を歌うのだが、勤務が終わり家に入って来ると階級がなくなり、隊長も兵も同じ場所で雑魚寝をしていた。隊長が背を丸めて階段に腰を下ろして、蚤をとっていたりしていた。私が、お手洗いに行こうと二階から降りるときに擦れ違うと、蚤をつぶしながら優しそうな目をして笑いかけた。休憩時間には、私たち子供相手にまりつきをしてくれた。日本語のまりつき歌を、懸命に覚えようとしていた。兵士たちもおとなしく、片言での話が弾み、母がつぼから赤かぶ漬を出してごちそうすると、若い兵士は、母の味だと喜んだ。

「八路は怖いぞ、人の皮をはぐぞ！」と、教えられていたのに、全く違っていた。ただ一度だけ、恐ろしいことを見た。私たちが遊んでいたときに、中学生の正君が私たちを呼びに来て、ひそひそとささやき、「八路は恐ろしいぞ！　牛のように人間の鼻に輪を通して、ひもで縛って連れて行くぞ！　今、見に来いよ」と言った。私たちは、正君の後から走ってついて行った。家並みのはずれまで来ると、白い墓標の野が広がっている。遙かかなたに、五人ばかりが、よろめきながら引かれて行くのが見えた。鼻の輪は見えなかったが、荒々しく引き立てられて行くのは、はっきりと分かった。「あんなに優しい八路の兵士が、敵には鬼となるのか？」と思い、目の前で引き立てられて

行く人に、父の姿が重なって、鬼をつくる戦争を憎んだ。

やがて、八路軍は去って行った。何一つ奪うこともなく、きちんと片付けて最後には、整列して革命歌を歌いながら、喜びに輝く顔をしながら出発した。

昭和二十年八月十五日の終戦の後、我が家に盗みに入ったのは、思いもかけない日本兵だった。軍服を脱ぎ捨てて父の背広に着替え、家で飼っていた鶏を殺して食べて逃げた跡もあった。最も激しい略奪、暴行をしたのは、ソ連兵である。戸を銃でたたき壊し、けて破って侵入して来て、貴金属や時計などを探して強奪して、次に女性を追い回して連れて行った。その後に来た、国民党軍もいんぎん無礼だった。カメラや、ゴルフ道具などを、取調べの証拠にすると称して持って行き、それっきり戻さなかった。兵隊とは泥棒だと思っていた私に、八路兵の礼儀正しく優しい態度は、子供心に深い感銘をもたらした。

四月に入ると、春光小学校の焼け跡で授業が再開されることになった。机も、椅子もないので、画板と座布団を持って登校した。日常の生活にも、毎日の学校生活にも少しずつ秩序が戻りつつあったときに、私たちは日本に引き揚げることになった。

おじさんも日本に連れて帰ろうと、おじさんの友人たちが集まってお骨にしてくれるということになった。お棺を掘り起こす日、白い墓標が立ち並んでいた雪の広野も、すっかり雪が溶けて緑の草が顔を出し始めていた。おばさんは、焼く前にもう一度、おじさんに会いたいと言って、お棺に取りすがったが、菅のおじさんはそれを拒んだ。「奇麗な姿のままの占部を、あなたの記憶の中にしっかりと納めておいて下さい。雪が溶けた今では、もう汚くなっているから」と言われた。

日本に向かって出発する日、私たちは背負える限り目いっぱいに、リュックサックに身の回りの物を詰めて、両手には持てる限りの物を下げた。八歳の弟も四歳の妹も、皆同じように荷物を持った。おばさんは、白布に包んだ骨つぼを斜めに肩から掛け、片側には栄養不良であまり歩けない隆ちゃんを抱き抱えて、背に

はいっぱいに詰まったリュックサックを背負っていた。もう、二度と訪れることのない家を、記憶の底に焼きつけるように見回すと、私たちは二列に並んで南新京駅に向かって歩き始めた。薄く緑をおび始めた広野に、限りなく並んだ土まんじゅうや、墓標の側を、黙々として歩き続けた。

結核性脳膜炎で亡くなった、遊び友達の妙子ちゃんや、中国人の強盗に家族共々頭を撃ち抜かれた、おまんじゅう屋の小林さん一家、国民党軍の拷問によって命を落とした竜野のおじさん、皆、皆この土の下に眠っている。墓標となってここに残る人と、祖国に向かって出発した私たちと、明暗二つの対称のようだが、長い隊列の中の幾人が、元気で日本の土を踏めるのか、だれにも皆目分からなかった。楡の若葉が揺れ動く下を、無蓋貨車で仕立てられた引揚列車の待つ、南新京駅に集結した。

あれから五十五年がたった。今から数年前のこと、珍しく弟から電話が掛かってきた。「遠藤誉さんの書いた、『卡子』という本を読んだ?」とのことだった。私はまだ読んでいなかった。弟は続けて、「占部のおじさんの家の辺りが、そっくり舞台なんだよ。あそこで何という事が起きたんだと、脳天をぶん殴られた思いで読んだよ」と、声を大きくして言った。

私たちが引き揚げて二年後の、昭和二十三年に長春市は、国民党軍が占拠したが、その周囲は共産党軍が取り囲み、両軍は対峙したが、両者の間には緩衝地として幅一キロメートルの中間地帯が設けられて、円形状に長春市は取り巻かれてしまった。閉じ込められた長春市民は、食糧を食べ尽くし、食べられる物は、犬や、虫までも食べていたが、それもなくなり飢えに飢えていた。食べ物を求めて人々は、中間地帯へ逃れ出たのだったが、春光小学校や、おじさんたちのいた家は、まさしくこの中間地帯のメインの場所だったのだ。この中間地帯から共産党軍の方には、厳重な柵があって入り込めない。共産党軍は、技術者など有能と認めたわずかな人しか入境させなかった。結果として十数万人の長春市民が中間地帯に捨て置かれた。「卡

子」とは、人が番をして狭い口をふさぐという意味だそうだ。いっさい食糧を与えられず、長春市にも戻れなくなった人々は、飢えて死体を食べた。死体の上に死体が重なり、何も知らずにそこに入ってきた人が、その死体の上で寝たということである。広野に山が見えると、その著者が書いていたので、「山なんかないわ！」と、叫ぼうとしたら、それは巨大な屍の山だった。私たちの住んでいた家は廃きょとなって、そこにも屍の山ができていた。白い墓標の数の何倍か分からぬ人々が、中間地帯に命を落としている。今は、一面に木が植えられて広大な林になっているとのことだった。

共産党軍のあの優しそうだった隊長を思うと、一人、一人は皆善人なのだが、それが集団となり組織化されると一変して、恐い集団となる。そして恐ろしい戦争をひき起こし、残虐な行動をするのだ。

二十一世紀は、戦争のむなしさを知った庶民が、立ち上がって手をつなぎ、戦争を回避することの努力をせねばならないと思う。私は、被爆国を作らぬよう、そして「卡子」を作らぬように心から祈るものである。

ああ！　母は北満の土となる

愛媛県　黒川壽子

一　大陸への雄飛

昭和九（一九三四）年四月、私は父、越智丑太郎と母、ユキヱの長女として愛媛県松山市で生まれた。父は愛媛県周桑郡丹原の農家の長男だったが、生来、農業はあまり好きではなく、若いときから東京に出て、働きながら芝浦電気学校の夜間部を卒業し、電気技術者になったが、東京では就職をせずに帰郷した。技術を生かして松山市の伊予鉄道株式会社に勤めているときに、同じ町の出身の知人の紹介で母と見合いをして結婚した。母は和裁がとても上手で、当時としてはまだ珍しかったミシンを使った裁縫を得意としていた。また、芸事も好きだったのか、お琴や三味線を習って